

平成8年度

地域畜産状況レポートNo.1
社団法人 熊本県畜産会

21世紀に向けて

〔熊本型放牧畜産事業〕の取り組み

熊本県畜産農業協同組合

熊本県の肉用牛（繁殖牛）飼養頭数の推移は、ここ10年間をみると平成2年の39,000頭をピークに減少を続け、平成8年には約27,000頭で30%程度減少している。

その要因としては、平成3年度の肉用輸入自由化が一番の要因であると考えられるのは勿論である。また肉用牛飼養者の高齢化と後継者不足も影響していると予想される。

このような状況下において、肉用牛経営は新しい時代を向かえ国内の動向と国外にも目を向け、企業概念を備えた考え方が必要であり、経営のリストラ・低コスト生産による足腰の強い肉用牛経営を目指す必要がある。

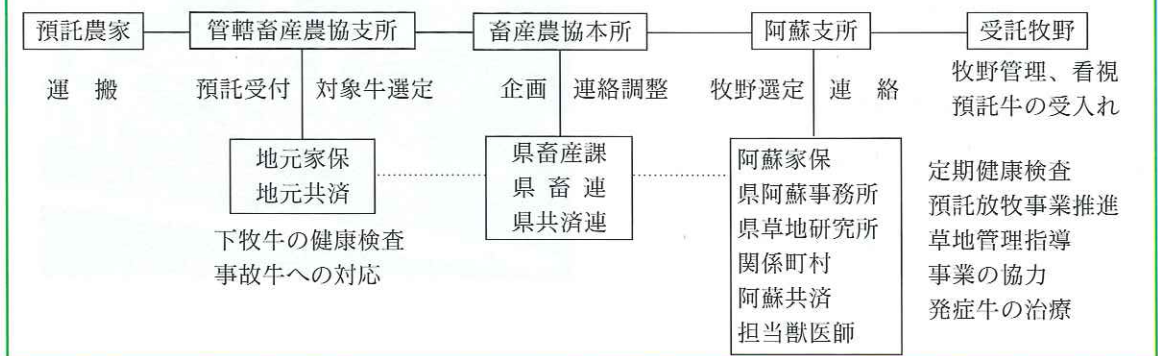
以上のことから、21世紀への肉用牛振興策の柱として、〔熊本型放牧畜産事業〕取り組むものである。

目的は

本事業は、『熊本型放牧畜産事業』と称し、平坦地域の肉用牛を阿蘇の牧野に放牧することにより、肉用牛経営のコストを低減するとともに、経営規模の拡大を推進し、併せて牛による阿蘇の牧野を守ることで「観光阿蘇」の景環を維持することを目的とする。

事業推進のためのフローチャート

(1) 事業推進体制



(2) 事業推進方法

ア. 受け入れ牧野の概要

阿蘇町山田東部牧野組合：面積約600ha、放牧頭数70頭（牛馬）、看視人常時1人

イ. 平坦部農家の預託概要

預託牛の選定条件：共済加入牛、看視人が容易に捕獲できる牛で放牧未経験牛は妊娠牛に限る。

預託期間及び頭数：平成8年度は、8月から11月まで35頭

ウ. 放牧衛生プログラムの作成

入牧期間の4ヵ月間に20日間隔で6回、関係機関、生産者等が牧野に集合し健康検査実施。

異常牛治療のための間隔施設の設置

今後の課題

(1) 業務推進体制の確立

ア. 作業の役割分担の検討

イ. 放牧衛生に対する認識

ウ. 預託に対する認識・預託意欲の向上と意識改革

エ. 農家レベルでの検討会

オ. 対象牛の選定

カ. 受託牧野側と預託農家の相互メリットの追求



(2) 施設整備

ア. 預託専用牧区の設置

イ. 現地避難舎の充実

(3) 飼養管理

● 入牧前

ア. 個管理（離乳、削てい等）

イ. 馴致放牧の実施

● 放牧中

ア. 濃厚飼料の補給、鈣塩の設置

イ. 放牧牛及び退避牛の観察徹底

● 退牧後

ア. 退牧牛への徹底したダニ駆除（同居牛への感染予防）

イ. ピロプラズマ病発症予防の徹底



<表1>

経済効果試算（労働費除く）

成牛35頭 延べ放牧日数 3,004日

	0	20	40	60	80	100(%)
県平均	1日当たりの飼養管理費×日数 700円×3,004日=2,102,800円					
平成8年 放牧試験	放牧料金及び放牧衛生費等 420円×3,004日=1,261,680円			節減額 約40%		

<表2>

放牧衛生プログラム

項目	区分	経 験 牛		未 経 験 牛	
		入 牧 期 間	5月随時		5月
放 牧 期 間		5月～11月		42日	60日
衛 生	血 液 検 査	入牧時、以降4週間隔		入牧時、以降2週間隔	
	ダ 二 駆 除	入牧時、以降2週間隔		入牧時、以降2週間隔	
	殺原虫剤注射	4週間隔		入牧後12日目より3日連続 注射、2週間隔	

- 備 考
1. 未経験牛の放牧期間については、放牧馴致期間である。
 2. 5月放牧牛は退牧後、状態が良ければ9月に再放牧可能。

今後の方向

今回の事業を進めていく段階で多くの問題を抱えていたのは事実である。しかしながら、前にも触れた通り、平成3年度の牛肉輸入自由化を期に日本の肉用牛経営の考え方にメスが入ったのも事実である。

例えば、自由化前の考え方であればコストを掛けた分、高く売れるのが当たり前という考え方である。しかしながら、最近は一部においては通用しても全般的には通用しない状況下にある。

その要因としては、消費者ニーズにあると予想される。消費者の多くは、より優れた品物を少しでも安く買いたいと思っているからである。

このような時代にあつて、少しでも労力を掛けず、低コストで足腰の強い経営を考えれば放牧の利用と、一方で県内において水田の裏作及び畑の未利用地を利用して、環境の保全を考えた放牧に挑戦しているところもある。

本組合としても、今年度より「熊本型放牧」と並行して、宇城地方で水田放牧の実証試験を実施している。

将来、このような放牧形態が定着し、夏山冬里方式また間年放牧のスタイルが確立できればと考えている。

21世紀に向けての、本県の肉用牛振興策は、阿蘇の広大な原野（牧野）を抜きにして考えられない。

肉用牛の振興とリンクした阿蘇の景観を後世に残すべく、県民一人一人が真剣に取り組むべきである。

